

大学教育の中で介護福祉士を養成することの意味を問う

介護福祉士養成大学連絡協議会公開シンポジウム開催

昨年発足した介護福祉士養成大学連絡協議会(以下、連絡協議会)の公開シンポジウム「大学教育の中で介護福祉士を養成することの意味を問う」が、7月18日(土)、東洋大学白山キャンパスで開催された。

介護福祉士養成大学は全国で66校を数え、今年4月より新カリキュラムがスタートしたところだが、特色あるカリキュラムづくりに取り組んできた各大学のほとんどが介護福祉士と社会福祉士の養成課程をもち、ほとんどの学生が2つの国家資格の受験資格取得を目指している。介護福祉士に求められる専門性と大学での養成教育のあり方をめぐって話し合われた。

シンポジストの西本典良氏(東北文化学園大学教授)は、大学教育の現状として、2つの資格取得のために余裕のないカリキュラムになっていないか、学生の社会性をどう育てるか、介護実習教育の到達点に無理がないか(目的を明瞭にしてもっと効率的にできないか)などを指摘したうえで、技術教育と実習教育のありようについて問い直しが必要ではないかと述べた。

卒業生の立場から入山未央氏(わかばケアセンター障害者介護課長)は、7年間の仕事をふり返って、現場では論理的な思考が求められ、論理的思考を養う機会が多いほど現場でより活かすことができる、大学教育の中で自分自身の課題と向き合い、福祉以外のことも学べた、(学生時代には)時間やチャンスは多くあったほうが良いと、大学で学んだ意義を述べた。

介護の現場からは山崎貴美男氏(横浜共生会経営企

画室長)が、共生会の事業の中で行なってきた職員研修について紹介し、施設側がどのような人材を求めているか、そして人材育成にどれほど熱心に取り組んでいるかを述べた。

コメンテーターの井上千津子氏(京都女子大学教授)は、介護は実践的な学問であり、教育の柱には技術教育があると思うと述べつつ、2つの資格取得のために学生が汲々とし、必要な知識が薄められ、人間教育がおろそかになっていないだろうか? ダブルライセンスを取得させることの意味を問いたいとコメント。

会場からは、「社会福祉士の実習をしている学生の中に『介護を深めてみたい』という学生も出てきており、たとえば認知症、障害などについて希望がある」「専門性の高い介護福祉士を育てているが、社会的にはまだ低く見られる現状がある。なんとか賃金アップにつなげることができないか?」などの意見が出された。

コーディネーターの本名靖氏(東洋大学教授)は、自身の15年間の教育実践から得たこととして、介護を学ぶ学生は(他学部の学生と比べて)豊かな可能性をもっていると思う、今後は社会福祉士と介護福祉士の実習教育をどのように統合していくかを考え、社会がどう評価するかについても見ていきたいと述べた。

この日は連絡協議会総会、ブロック別交流会も開催され、北海道医療大学から鹿児島国際大学まで34大学、約50名の出席があった。

●介護福祉士養成大学連絡協議会の問い合わせ：
事務局 〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1
東洋大学ライフデザイン学部 渡辺裕美研究室内
hwatanabe@toyonet.toyo.ac.jp